

同一性とこのものの性

星野 徹*

クラークは、ライブニッツにあてた第三返書の中で、たとえ空間が諸事物の秩序にすぎないとしても、神は、等しい三つの物質片 a, b, c を a, b, c の順序に並べることもできただろうし、 c, b, a の順序に並べることもできただろうと言う。ライブニッツは、もちろん識別することのできないようなものが存在するというクラークの想定を認めることはない。しかし、仮にそのようなものが存在するとしても、ライブニッツによれば、質的にも量的にも異なるところのない物体は、どのように並べられようと差異はないのであり、したがって、三つの識別することのできない物体を並べる順序は一つしかないのである（ライブニッツ、1989）。

本稿ではクラークの提起した問いを検討することにする。それによって、ものと同一性をめぐらる問題に何等かの照明が与えられると考えるからである。

I 不可識別者同一の原理とこのものの性

次のようなケースを考えてみよう。絶対空間の中に、同じ性質を持った二つの球が存在しているとしよう。二つは、形も大きさも色もまったく同じである。二つはその占める位置だけが異なるのである。二つの球は、世界に出現した後、しばらくは同じ位置にとどまっていたが、やがて動き出す。お互いに接近し始め、交差し、相手のいた位置に到達したところで停止する。二つの球を、それぞれ、 a, b と呼び、 a が最初にいた位置を l 、 b がいた位置を m と呼ぶとす

れば、 l から出発した a は m で、 m から出発した b は l で停止するのである。さて、二つの球が動き始める前の世界と、再び静止した後の世界は同じ状態にあるのだろうか。球が停止したとき、世界は元の状態に戻ったのだろうか。

動き始める前と、再び静止した後では、性質の空間的配置に関してはいかなる違いもない。同じ場所に同じ性質が例化している。それにもかかわらず、私は、世界が創世の状態を回復するためには、球が再び動き始め、 a が l に、 b が m にたどり着くことが必要であるという思いに駆られる。創世の世界と停止後の世界は、性質の配置は同じでも、ものの配置が異なるように思われるからである。停止後の世界において l にいる球は創世時には m にいたのではないだろうか¹。

創世時の世界と停止後の世界が異なった状態にあるのだとすれば、それでは、創世時においても、 a が l ではなく m に、 b が m ではなく l に出現することもありえたということなのだろうか。ライブニッツの見解に反して、神がボール世界を創造する際に、神は質的に異なることのない二つの可能性のうちから一つを選択しなければならなかったのだろうか。

この問題は、絶対空間の想定とは独立である。東京上空と大阪上空に、突然、同じ性質を持った球が出現したとしても同じことである。東京上空に出現したこの球が大阪上空に、大阪上空に出現したあの球が東京上空に出現するということもありうるのだろうか、と東京の住民は問うかもしれない。東京上空の球と大阪上空の球には、ごく些細な点で違いがあると仮定しよう。大阪上空の球は一面真っ白であるのに

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授 哲学

対して、東京上空の球には、一箇所、ごく小さな黒いしみが付いているのである。その場合、小さなしみ付きのこの球が大阪上空に出現して、全面が白のあの球が東京上空に出現したかもしれないと考えることは理にかなっているように思われるだろう。取るに足りない性質の違いによって、この東京上空の球が大阪に出現することが可能になったり不可能になったりするということは考えにくいことである。東京上空の球と大阪上空の球は、質的に異ならないとしても、数的に異なるのなら、やはり、東京上空の球が大阪上空に、大阪上空の球が東京上空に、それぞれ出現することもできたのではないだろうか。

今度はこれを次のようなケースと比較してみよう。神が地球を創造したとき、地球表面の大気は一樣であった。そこで神は、二か所に気圧の低い部分をつくろうと欲した。そして、北極点上空と南極点上空を中心とする、同じ気圧で、同じ勢力範囲の二つの低気圧を創造した。北極上空の低気圧を北極低気圧、南極上空の低気圧を南極低気圧と呼ぶことにしよう。この場合の「北極低気圧」「南極低気圧」はもちろん固有名詞である。北極低気圧と南極低気圧は、しばらくは極点上空にとどまっていたが、やがて南極上空の低圧部は180°線に沿って登り、北極上空の低圧部は、0°線を下り始めるとしよう。登り始めた低圧部が北極上空で停止し、下ってきた低圧部が南極上空で停止したとき、地球の気圧配置は元に戻ったのである。それでは、二つの低圧部が移動を終えた後の地球は、北極低気圧が南極上空に、南極低気圧が北極上空にあるという点において、移動前の状態と異なっていると言ふべきなのだろうか。また、神には、北極低気圧を南極上空に、南極低気圧を北極上空につくこともできたのだろうか。

神が北極と南極につくったのが低気圧ではな

く山ならばどうだろうか。地球は可塑性を持っており、神は南極と北極を隆起させることによって、同じ高さと同じ形をした山をつくったのである。神は北極につくった山を南極に、南極につくった山を北極につくこともできたのだろうか。

それは不可能なことであるように私には思われる。神はこの山を南極に、これと同じ高さと同形のあの山を北極につくろうという意志を持ってそれぞれの山をつくったわけではないだろうからである。山をつくるときに神の心にあつたものはといえば、おそらくは、北極と南極を同じ高さまで隆起させようという意志だけである。

神は、二つの山の隆起の速度に差をつける事はできただろう。しかし、隆起の速度の違いが、北極山の北極山性と南極山の南極山性を生むわけではないだろう。また、高さの違う山をつくろうとする場合には、北極山を高くするか南極山を高くするか、二つの可能性が神にはあることだろう。しかし、ここには謎めいたことは何もない。雪だるまの決まった場所をくりぬいて目を二つ作る際に、右目と左目が同じ大きさならば選択の可能性はないのに対して、片目をウイックしている雪だるまをつくる場合には、右目を閉じさせるか左目を閉じさせるか、二つの可能性があるのと、それは同じことである。

こうしてできた山が、低気圧の場合と同じように移動を始めたとして。地面が隆起することによって山ができるならば、山の移動は波と同じである。北極山と南極山が移動するとき、地表が波打つのである。南極山が180°線に沿って上昇し、北極点に到達すると同時に、0°線を下った北極山が南極点に到達する。そのとき、地球は、神による造山活動が終了した時点と同じ状態に戻ったのだろうか。それとも、先程は北極山が北極に、南極山が南極にあつたのに対して、今は南極山が北極に、北極山が南

極にある、と言うべきなのだろうか。

同時に極点を出発した二つの山が、ともに 0° 線上を、一方は下り、もう一方は登った場合はどうだろうか。やがて、赤道直下で二つの隆起部分が重なりあうだろう。こうしてできた隆起部分の形も高さも、北極山と南極山と変わらないとすれば、そのとき、地球上には山が二つあるのだろうか、それとも山は一つしかないのだろうか。地球上には何か所の隆起部分があるかという問いならば、それに答えることは容易である。盛り上がったところは一つしかないからである。それならば、山もやはり一つしかないと言うべきなのではないだろうか。

赤道直下で一つになった山は、やがて二つに分かれ、北上と南下を始めるとしよう。そのとき北へ向かうのは、先程南極にいた山、すなわち南極山なのだろうか、それとも北極山が元いた場所へ帰ろうとしているのだろうか。地球の様子を観測している火星人ならば、南極からやってきた山がまた北上を始めた、と考えることだろう。では、神ならば、北極山が帰還する状況と南極山が北へ向かう状況を区別することができるだろうか。神は、あるときには南極山を北上させ、別のときには北極山を北上させるということもできるのだろうか。

もちろん神にもそのようなことはできないだろう。山を移動させているとき、神は、ただ、順番に地面を盛り上げているだけだからである。それならば、 180° 線を登る南極山が北極点に到達し、北極山が裏側の 0° 線を通して南極点に達したときには、地球は造山活動終了時の状態に戻ったのだ、と言うべきなのではないだろうか。先程南極にいたあの山が今は北極にいる、と言うことはできないのではないだろうか。

造山時にも、移動終了時にも、確かに山は二つある。しかし、山が移動すると言うとき、同一の山の空間的位置が変化しているわけではな

い。地面の隆起部分が刻々と位置を変えているだけである。したがって、あるときにある場所にある山と、別のときに別の場所にある山が同じ山か否か、という問いには答えはない。山を隆起部分と言いかえてみるとよいかもしれない。先程南極にあった隆起部分と、いま北極にある隆起部分は同じものだろうか、と聞かれても、答えに窮するだろう。

波のように、数えることはできるが、通時的同一性の概念を厳密に適用することができないようなものを、弱いこのもの性(thisness)を持つ対象と呼ぶことにしよう。高気圧や低気圧も弱いこのもの性を持つものの仲間である。二つの低気圧が合体し、また二つに分かれるという状況を考えることはできるが、別れた後の二つの低気圧は、合体する前のどちらと同じなのか、という問いに確定的な答えは存在しないだろう。また、神が両極に同じ気圧と勢力範囲の低気圧をつくるやり方は一つしかないだろう。

ところで、世界にはこのもの性を持たない対象というものも存在する。虹がそうである。午前中に西の空に虹が出ていたが、午後になって東の空を見たらやはり虹が出ていた。午前中に出ていた虹と午後に出ていた虹は同じものだろうか。一日中虹が出ていた場合は同一の虹が出ていたのであり、お昼に10分ほど虹が消えていた場合は、午前に出ていた虹と午後に出ていた虹は別のものであるということになるのだろうか。あるいは、太陽が一つである限り、これまでに地球上に現れた虹はすべて同じものなのだろうか。

結局、虹には通時的同一性の概念が適用できないのである。それに加えて、虹は数えることもできない。今、新宿の高層ビル街の上空に虹がかかっている。西へ移動しても虹は依然として見え続けていて、今は富士山の上にかかっているのが見える。富士山上空の虹と、新宿上空

の虹は同じものだろうか。日本列島を北上すると、今度は松島の上に虹が見える。富士山と新宿と松島の虹は同じものなのだろうか。別だとすれば、日本列島を北へ西へと移動する人はいくつの虹を見たことになるのだろうか。

今日、日本列島のどの場所で虹が見えたか、と問うことはできるが、今日、日本列島にはいくつの虹が現れたか、と問うことはナンセンスである。虹は、一つ、二つと数えることはできないのである。虹の数を数えることができないのは、虹を空間内に定位することができないからである。だから、虹には見かけの大きさはあるが本当の大きさというものもない。虹の直径は何キロメートルかという問いにも答えがないのである。

神が地面を隆起させることによってできた山は弱いこのものの性を持つが、同じ山でも、神が盛り土をしてつくる場合には事情が異なる。神は地球を創造した後、新たに二つの均質な土塊を北極と南極に出現させることによって北極山と南極山をつくったとしよう。そのようにしてできた山を神が移動させようと欲するとき、神はどのような意志を持ち、何をすることによってその意志を実現するのだろうか。神は、北極にあるあの土塊と南極にあるあの土塊を移動させようと意志し、そして実際にそれぞれの土塊を動かすことによって山を移動させるのではないだろうか。それならば、南極山が北極に、北極山が南極に達したとき、火星にとっても、神にとっても、先程南極にあったあの山が今は北極に、北極にあったあの山が今は南極にあるのである。二つの土塊が地上を移動する際、地表に痕跡を残さなかったとすれば、移動前の地球と移動後の地球は、質的にはまったく変わることがないにもかかわらず、土塊の位置が異なっているという点において、異なった状態にある。盛り土をしてできた山は、その点

において、地面が隆起してできた山ではなく、ボール世界におけるボールの仲間なのである。

それでは神は、二つの山をつくるに際して、北極山を南極に、南極山を北極につくることもできたのだろうか。神の手許にあらかじめ土塊が準備してあったのならば神にはそうすることもできただろう。例えば、土塊の外側の部分で北極山を、内側の部分で南極山をつくることもできただろうし、外側の部分で南極山を、内側の部分で北極山をつくることもできただろう。こうして、神には無数の可能性があることになるだろう。しかし、神が、無から土塊を二か所に出現させることによって二つの山をつくる場合はどうだろうか。

まずは、神が山を一つだけつくる場合から考えてみよう。神が土塊で北極に山をつくったとしよう。神は、そうしてつくった山のかわりに、同じ種類の土塊でできた、同じ高さを持ち同じ姿をした別の山を、現在山がある場所につくることのできたのだろうか。神が、山をつくるために、まず初めに、同じ姿かたちをした同じ高さの山の観念を複数抱き、その後、その中から一つを選んでそれを北極に出現させるのならば、神にはそれも可能だっただろう。こうしてできた山は強いこのものの性を持つ、とすることができるかもしれない。強いこのものの性を持つものには、人間の目に見えない個体識別番号が付いているのである。こうしてできたこの北極山は、同じ性質を持った無数の可能な山の中から神によってこれとして選出されたのである。神は、この山をつくろうと欲し、その結果、この山が出現してきたということになるだろう。

しかし、そのような神は充足理由律に従わないことになるだろう。無数の観念の中からあれではなくこれを選ぶための十分な理由を神は持たないからである。また、神には、つくるべき山の高さや山容を決めた後に、同じ性質を持つ

た無数の山の観念を抱く合理的な理由もないように思われる。無駄を嫌う神ならば、山の性質を決めたなら、直ちにそのような性質を持った山を創造するだろうからである。神は、ある性質を持った山をつくろうと欲し、その結果、この山が出現したのである。

同じ性質の山を二か所につくる場合も同じことである。神は、無数の同じ性質を持った山の観念の中から二つを選ぶわけでもなければ、同じ性質の山の観念を二つ抱き、そのうちのどちらかを北極に、どちらを南極に出現させようかと思案するわけでもない。神は、山の性質を決めた後は、やはり、直ちにそのような性質の山を北極と南極に出現させるだろう。したがって、盛り土でできたあの北極山が南極に生じたり、あの南極山が北極に生じたりすることはありえないことだろう。二か所に同じ性質を持った球を創造するときにも、合理性を好む神ならば、同じ性質の球を二か所に出現させようという意志を持つだけである。したがって、東京上空に現われたあの球が大阪上空に現われ、大阪上空のあの球が東京上空に現われたかもしれないなどという想定は、ライブニッツの言うように無意味であるということになるだろう。

世界内に質的に異なるところのないものが複数あったとしても、それが物体であるならば、今日のこれと昨日のあれが同じであるか否かという問いには確定的な答えがあるのでなければならない²。しかし、それが物体でしかないならば、見えない個体識別番号によってそれが個別化されるということはない。物体が個別化されるのは、他の物体との関係とその履歴による。通時的同一性の概念を適用できるが、神のみが知ることのできる個体識別番号が付いているわけではないという意味において、物体は中位のこのものを性を持つとすることができるだろう³。

しかし、東京に現われた白い球に一箇所黒い

しみが付いてただけで、東京上空のしみ付きの球が大阪に、大阪上空の純白の球が東京に出現することもありえたことになるとは、やはり奇妙なことではないだろうか。

こうした疑念は誤解に基づくものである。東京上空の球と大阪上空の球にわずかな違いが生じただけで、東京上空と大阪上空に出現する球の配置に関する選択肢が一つから二つになるということは確かである。だが、だからといって、東京上空にあるあのしみ付きの球が大阪上空に出現することも可能であったことになるというわけではない。

東京上空に出現した黒い斑点のある球が大阪上空に移動し、大阪上空に出現した純白の球が東京上空に移動するということはありうることである。そのとき、ここにある球が大阪上空にあるのである。大阪上空ではなく、東京上空に純白の球が、東京上空ではなく、大阪上空に小さな黒い斑点のある球が、それぞれ出現することも、また、ありうることである。では、そのとき、その世界では、今東京上空にあるあの球が、東京ではなく大阪に出現したことになるのだろうか。それとも、いま東京上空にあるものと質的に同一の、しかし、数的には異なった球が大阪上空に出現したのだろうか。

再び、神が無数にある同じ種類の斑点入りの球の原型の中から一つを選んでそれを東京上空に創造すると仮定しよう。そのような神のもとでは、大阪に、東京上空の球と質的に同一で数的に異なる斑点入りの球が出現する状況と、数的に同一の球が出現する状況を区別することができる。神は、東京に創造することに決めたこの原型を大阪上空に創造することも、また、東京上空に創造したのと同じ種類に属する別の原型を選んで、それを大阪上空に創造することもできたからである。前者の場合、東京上空にあるこの球が大阪上空に出現したのであり、後

者の場合は、東京上空にあるこの球と、質的に同一ではあるものの数的には異なった球が大阪上空に出現したのである。しかし、合理的な神ならばそのようやり方で二つの球を創造しはしないだろう。合理的な神は、白球と斑点入りの球をどのように配置するか決めるだけである。

世界が全くの無から出現した場合も同じことである。東京上空の斑点入りのあの球が大阪上空に出現したかもしれないと考えるとき、そこで想定されているのは、東京上空に現れた球と同じ性質の球が大阪上空に現れるような状況である他はない。大阪上空に斑点入りの球が無から出現するような可能世界において、出現した球は、現実世界の東京上空のあの球と数的に同一であるわけでも数的に異なるわけでもないのである。

それでは、世界には強いこのものの性を持つものは存在するだろうか。スウィンバーンは、魂はこのものの性を持つと言う(Swinburne, 1997, New Appendix D)。スウィンバーンのこのものの性とは、本論における強いこのものの性のことである。スウィンバーンは、私とまったく同じ物理的、心的性質を持ちながら、それが私ではないような人間が存在する可能世界があると考えているからである。しかし、ここで詳細に立ち入る余裕はないが、魂や心が物と独立に存在するとしても、それらが強いこのものの性を持つと想定することによって説明されることは何もないように思われる⁴。世界に存在するものは、おそらくは、たかだか中位のこのものの性を持つにすぎないのである。

II 通時的同一性

ボール世界において、二つの球は互いに近づき、交差し、やがて相手のいた位置に到達し、停止する。同一の球が、空間的位置を変えるの

である。しかし、同一の球が時間を通じて存在し続けるとはどのようなことなのだろうか。

シューメイカーとアームストロングは、ものの通時的同一性にとって必要なのは、時空連続性ではなく因果的連結性であるという通時的同一性についての因果説を提唱し、因果説の例証となるようなケースを考案している(Shoemaker, 1979, Armstrong, 1980)。アームストロングが提示するのは次のようなものである。

二人の神がいるとしよう。第一の神は鉄でできたあの無粋なエッフェル塔が嫌いである。そこで時刻 t にエッフェル塔を世界から抹消した。エッフェル塔の存在を知らない第二の神は、一つの巨大な塔を創造したが、偶然、その塔はエッフェル塔と瓜二つであり、しかも、第二の神はその塔を時刻 t に、エッフェル塔のあったその場所に創造したのである。第一の神が抹消したエッフェル塔をエッフェル塔1、第二の神が創造した塔をエッフェル塔2と呼ぶとすれば、エッフェル塔1とエッフェル塔2は同じ塔だろうか、それとも、まったく同じ性質を持った別の塔だろうか⁵。

エッフェル塔1とエッフェル塔2の違いをだれも識別できないとしても、二つは別の塔である、というのがアームストロングの答えである。エッフェル塔1とエッフェル塔2は、時空的に連続してはいるものの、因果連鎖が途絶えているからである。アームストロングとシューメイカーによれば、ものが存在し続けるとき、そのものの先行する時間部分と後続の時間部分は、内属的因果(immanent causation)と呼ばれる因果関係によって連結しているのである。ものの通時的同一性にとって時空連続性は必要でさえない。間欠的に存在するものでも、因果的に連結していれば、それは同一のものなのである(Armstrong, 1980, 1997)。

アームストロングのストーリーにおいては、

確かに最初のエッフェル塔は存在しなくなるように思われることだろう。また、ものの通時的同一性にとって時空連続性は十分ではないということも、確かなことであるだろう。しかし、アームストロングの仮想的なケースが、ものの通時的同一性が因果関係に還元されるということを示しているようには私には思えない。

アームストロングやシューメイカーによれば、時刻 t_1 における a が時刻 t_2 における b と同一であるのは、 a と b が内属的因果と呼ばれる特殊な因果関係にあるときに限るといふ。そして、内属的因果とはものがそれ自身と入れ替わることであり、あるいは、ものがそれ自身を生み出すことであると言われる。しかし、通時的同一性の問題を問うとき、われわれは、それ自身であるとはいかなることであるかということを知りたいのである。

私は、部屋の机が何年にもわたってこの場所にずっと存在し続けていると信じている。夜の間にこっそり入れ替えられたと考えようと思えば考えることはできるが、すくなくとも、私が机に向かい始めてからの数十分間に関しては、同じ机が存在し続けていると確信している。それは、この数十分の間、視野の一部を黒い物体が占め続けているし、本や書類がずっと支えられているし、肘には同じような感触が持続的に生じているからである。同質の知覚体験が継続しているということが、私が、同一の机の持続的存在を信じる根拠となっている。ここで、今から十分前に第一の神が最初の机を消滅させ、同時に第二の神が最初の机と同じ性質を持つ机を出現させたのだ、と聞かされても、もちろんその言葉を真に受けることはないだろう。しかし、それは論理的にありえないわけではなさそうだし、実際そのようなことが起こったとすれば、最初の机はもう存在してはおらず、目の前にある机はそれとは見分けがつかないとしても

別のものなのだ、と思うことだろう。そう思いながらもまた、一方では、机を眺めながら、別のものといつてもいったい何が別なのだろう、といふことだろう。それに加えて、十分前に机の時間部分の間の因果連鎖が途切れたのだ、と聞かされても、そのことによって、机の同一性に関する私の信念が補強されたり減じたりすることはないだろう。

私が、二つが別のものであると思ってしまうのは、最初の机が消滅したと聞かされたからである。ものの消滅は他の何かに還元されることのない、端的な、基本的な事実である。そして、消滅したものはもうないと私は固く信じているのである。最初の机はもうないという私の信念に、因果関係に関する知識はまったく関与していないのである。

なぜものは突然消えたりしないのか、あるいは、なぜものは存在し続けるのか、という問いに対してならば、内属的因果を持ちだして答えることは妥当なことである。ものはそれ自身を産出するのである。しかし、ものが時間を通じて同一であるとはどのようなことか、という問いに対しては、内属的因果による解答は場違いである。われわれは、ものが存在し続ける原因を知りたいわけではないからである。それは、ちょうど、ものが静止しているとはどのようなことか、と問われて、慣性の法則を持ち出すようなものである。慣性の法則は、ものはなぜ突然動きださないのか、と聞かれたときのためのものなのである。静止しているものは、力を加えられない限り静止したままである。だからものが突然ひとりで動き出すことはないのである。静止の問題に関して求められているのは、たとえば、ものが静止しているとは、どの時点においてもそのものが同一の地点にあるということである、といった類の答えである。そして、通時的同一性の場合、ものが時間を通して

同一であるとは、類似の性質が時空的に連続して例化していることである、という答えが正しいものではないように思われるということが問題なのである。

アームストロングのケースをより日常的な例と比較してみよう。我が家に供給される電気が、午前零時に、火力発電によるものから原子力発電によるものに切り替わるとしよう。部屋の電球を一晚中灯し続けているとすれば、あかりの産出源は、火力発電所のタービンから原子力発電所のタービンへと午前零時を境として変わることになるだろう。切り替えが円滑に済めば、どの時点をとっても部屋の電球はついたままでいることだろう。では、部屋の電球が夜通し灯り続けているとき、同一の状態が継続しているのだろうか、それともそれは、零時を境界とする二つの状態なのだろうか。途中で消えることもないし、明るさも変わらないのならば、同じ状態が続いているのである、と言いたくなくなるだろう。

ものが突然消えてしまわないのは内属的因果のおかげであるという説が正しいとすれば、神は、エッフェル塔がある場所一帯の内属的因果を一時的に無効にすることによって、エッフェル塔を消滅させることができるだろう。それを知った法則的な世界を好む第二の神が、内属的因果が無効化されると同時にそれを復活させたとすれば、エッフェル塔は存在し続けるだろうか。内属的因果の担い手が代わっても因果自体が成立し続けているならば、電源が変わってもあかりが灯り続けるように、同一のエッフェル塔があり続けている、と考えるのが自然なことだろう。困難な問題が生じるのは次のような場合である。

第二の神はエッフェル塔が大好きである。第二の神はエッフェル塔を消そうという第一の神の意志を知り、危機感を抱く。そこで第二の神

は、第一の神がエッフェル塔を消滅させたその瞬間に、消滅したエッフェル塔を再び出現させようと心に決める。第二の神が、単にエッフェル塔と同じ性質の塔を出現させようと意志するだけならば、そこで出現するのはあのエッフェル塔ではなく、エッフェル塔もどきであるかもしれない。そうではなく、第二の神が、あのエッフェル塔自身を再現させようと意志したとすれば、その意志は実現されるだろうか。それとも、そのような意志を抱くことは、エッフェル塔の隣にエッフェル塔と数的に同一のエッフェル塔をもうひとつ出現させようと意志することが不可能であるように、意志の内容が矛盾しているがゆえに、神にとっては不可能なことなのだろうか。一度この世界から消えたものそのものがもう一度存在するようになるということは可能なことなのだろうか。

問題のありかをより鮮明にしてみよう。神は私の部屋にあるこの机を瞬間的に南極へ移動させることができるだろうか。神は無限の速度で机を南極へ運ぶことによってこの机を瞬間移動させることならできるかもしれない。いずれにせよ、この問題は時間と空間の特性にかかわる問題である。では、神はこの机を消滅させると同時に、南極にこの机と同じ性質を持つ瓜二つの机を出現させることもできるだろうか。また、神はこの机を消滅させると同時に、瓜二つの机ではなく、この机そのものを南極に出現させることもできるだろうか。あるいは、神はこの机を消すと同時に、同じ位置にこの机を再び出現させることもできるのだろうか。消滅 20 分後ならばどうだろうか。これらはいずれもこの机とはいったい何ものなのかという問いなのである。

ものが強いこのものの性を持たないとは、神が特定のものを創造するとき、このものをつくらうと意志することによってこのものを出現させたわけではないということである。神は、特定

の性質を持つものをつくろうと意志し、その結果このものが生まれたのである。しかし、この机を消滅させると同時に、南極にこの机を出現させることが可能であるとすれば、そのときには、神はまさにこの机を南極につくろうと欲し、その結果この机が南極に出現することになるだろう。

ここで、再びボール世界について考えてみよう。神は、ボール世界にある二つの球を消滅させた後、そのうちの一方を再び出現させることができるだろうか。現実世界から消えた球が神のもとへと帰って行くのならば、神は手許に戻ってきた球のどちらを再び現実世界に出現させるか選択することができるだろう。しかし、球が消滅するとは、それらが完全に無に帰するということである。神は再び球を創造しなければならないのである。東京上空の球を再創造しようとするときと、大阪上空の球を再創造しようとするときでは、神が抱く観念に違いがあるだろうか。神は、東京上空の球の観念と大阪上空の球の観念を抱き、そのうちのどちらかを原型として球を再創造するのだろうか。

神が不可識別な二つの球を創造するとき、神が必要とした原型は一つだけである。神の腕に狂いがなく、原型と実物に寸分の違いもないとすれば、神が二つの実物について抱くことができる観念にも違いがないはずである。東京上空の球と大阪上空の球には、位置の他にはいかなる違いもないからである。もちろん、神には現実世界に存在する球のあちらを消去することもできるし、こちらを消去することもできるだろう。しかし、現実世界に存在する同種の球を原型として球を再創造する際には、神には一つのやり方しかない。したがって、二つの球が消滅した後、例えば名古屋上空に、消滅した球とそっくりの球が出現したとしても、それは、どちらかの球と数的に同一であるわけでも、数的に

異なっているわけでもない。神が再創造する球が一つではなく二つの場合も、百の場合も同じことである。新たに出てきた百個の球のうち、どれかが東京上空にあった球と数的に同一であるわけではないし、すべてが東京上空にあった球と数的に異なるわけでもない。ただ、東京上空と大阪上空にあった球と質的に同一の球が百個出現しただけである。だとすれば、この机を消滅させると同時に、南極にこの机と瓜二つの机を出現させることと、この机そのものを出現させることの間の違いも、神においては存在しないことになるのではないだろうか。

仮に、神がこの机を私の部屋から消滅させると同時に南極に出現させることができるとしよう。神はおそらくこの机を南極に創造しようとして意志することによってそうしたのである。それならば、神はまた、この机を南極に百個創造しようとして意志することもできるのではないだろうか。全能の神は、一つの原型から無数の物をつくることのできるだろうからである。神はまた、私の部屋のこの机はそのままだ、この机と同じ机を南極に創造しようとして意志することもできるのではないだろうか。この机を原型としてものを創造する際、この机の現存が神の能力に制約を加えるということは考えられないからである。しかし、もちろん神にはこの机と数的に同じ机を複数創造することはできないし、この机が現存しているにもかかわらず、この机と数的に同じ机をどこか別の場所につくるということもできない。それは神の能力に限界があるからではなく、われわれの持つ数的同一性の概念が、神の創造をそのように記述することを許さないからである。一つのもものが複数のものと数的に同一であることはできないし、同じ時刻に別の空間的位置を占めているものがあれば、それは別個のものなのである。こうしてできた南極の百個の机は、私の部屋にあった机とは数的に別の

ものであるし、私の部屋の机と同時に南極に存在する机は、やはり私の部屋にある机とは別のものである。結局、神がこの机を南極に百個創造しようとするとき、この机と質的に同一の机を南極に百個創造しようとするとき、二つのケースにおいて、南極に出現する机にはいかなる違いもないのであり、神の意志においても二つの状況には区別がないのである。

机を一つだけ創造する場合も同じことだろう。机を一つ南極に創造する場合でも、この机そのものを南極に創造することと、この机と質的に同一で数的に別個の机を南極に創造することは、神にとっては違いがないということになるだろう。神は、私の部屋の机を原型として南極に机を創造するだけである。そのようにして南極に出現した机は、私の部屋にあった机と同じ性質の机ではあるものの、それに加えて、数的に同じであったり数的に異なっていたりするわけではないだろう。

間欠的存在に関しても事情は変わらないように思われる。24時間ごとに球が出現と消滅を繰り返すような世界を考えてみよう。一日おきに現われる球が質的に異ならないならば、神が球を創造する際に行ったことは、特定の性質を持った球が一日おきに出現と消滅を繰り返すような世界をつくらうと意志することだけである。無数の球の観念を前に、どの球をどの順番で出現させるかと神が頭を悩ませるわけではない。そのような世界において、間欠的に存在する球は、数的に同一であるわけでも数的に異なるわけでもない。それは、質的に同一であるだけである。

われわれが持つ数的同一性という概念は、消滅と出現を繰り返す対象や、一度消滅した対象と後続の対象に適合するようにはできていないと言ふべきなのである。

Ⅲ ものと性質

低気圧や地表が隆起することによって生じた山は弱いこのもの性を持つ。低気圧や地表が隆起することによってできた山は、数えることはできるが、確定的な通時的同一性を持たないということである。それらが確定的な通時的同一性を持たないのは、それらが物体ではなく、物体の様態(mode)であり、その時々々の物体の在り方(way)であるからである。低気圧は地球を覆う大気の様態であり、山は地表の様態である。性質(property)とはものの様態のことであるとすれば、性質は通時的同一性を持つことがない。ところで、性質は確定的な通時的同一性を持たないだけでなく、数えることもできないと言われることがある。たとえば、ロウは次のような例をあげている(Lowe, 1998, p. 82)。

ゴム製のボールが衝撃によって形を変え、すぐに元の形に戻ったとき、そのボールは、最初の形と質的(qualitative)に同一な、しかし、数的には異なった形を獲得したのだろうか。それとも、最初の形が舞い戻ってきたのだろうか。テニスの試合中に、ボールはいくつの球形を持つことになるのだろうか。ロウによればこれらの問いに答えはない。性質については、質的に同一か否かを言えるだけなのである。しかし、ロウのケースは、数的同一性に関して物体と性質には違いが存在するというを示す例としては適当ではない。出現と消滅を繰り返すボールについても数的同一性を問うことができないからである。他方、テニスコートに百個のテニスボールがあるとすれば、テニスコートには百個の球形が存在するという言い方も許容されることだろう。形に関してならば、ある時点において、特定の空間領域に、特定の形がいくつ存在するか、と問うことは可能であるように思われる。

しかし、性質の中には数えることができないようなものも確かに存在する。においや音のような一部の可感的性質がそうである。東京と大阪ににおいが立ち込めてきたとしよう。東京のにおいと大阪のにおいは同じものだろうか。私が今東京でにおいを感じているならば、このにおいと大阪のにおいが同じであるとは、私が今大阪にいれば、これと同じ質の嗅覚体験を持つだろうということである。におい体験に関しては、質的に同じであったり異なっていたりすることができるだけである。同じ理由により、においには通時的同一性もない。私が今体験しているにおいと昨日のにおいは同じだろうかと思問するとき、私は二つの体験が質的に同じか否かと問っているのである。また、においには反実仮想も成り立たない。

私が今においを感じていないということならばありうることである。私は蓄膿症になっていたかもしれないからである。目の前のバラの花がにおいを発していないということもありうることである。バラがしおれていたかもしれないからである。私の状態や知覚対象の状態は別様でもありえたのである。しかし、私や知覚対象ではなく、このにおい自体が別様でありえたかもしれないという想定は意味をなさない。においだけではない。白いボールを見ながら、これが別様であったかもしれないと思ってみることは可能である。ボールが黄色に塗られていたかもしれないからである。また、それとは違った意味で、これが別様であったかもしれないと思ってみることもできる。私は眼に異常をきたしていたかもしれないと想定するときがそうである。前者の「これ」はボールの状態を、後者の「これ」は私の視覚体験の質を指している。しかし、白さを何かの様態としてではなく、白さそのものとして指すとき、私は、これが別の様であることもできただろうか、と思ってみるこ

とはできない。そのとき私は、今私に見えているこの白さそれ自体を、いわば、その本質的相のもとに指しているからである。今私にはまさにこれが見えているのであり、今私はまさにこれを嗅覚的に感じているのである。

可感的性質に対する指示は、知覚体験と分かちがたく結びついている。だから、可感的性質を数えようとするときには、知覚体験の原因となった物体を数える以外に方法はない。東京と大阪にそれぞれ巨大なバラが出現して、それがおいの原因となっているのならば、東京と大阪のにおいは、質的には同じでも数的には別であるということもできるだろう。しかし、それはあくまでも、においを発する物体が二つあるという意味である。今日も昨日と数的に同じバラを前にしており、それに加えて、バラの状態にも変わりがないならば、今日のにおいと昨日のにおいは、質的にはではなく数的にも同じものである、と言えるようにも思われるかもしれない。しかし、こちらは適切ではない。数的に同一のバラが同じ状態にあるとは、数的に同一のバラが質的に同一の状態にあるということだからである。

ものの性質でも、もろさや水溶性、毒性のような傾向性は、可感的性質とはまた異なる。可感的性質ならば、ものとは独立に、それだけで存在する様を想像してみることはできるが、もろさや水溶性がものと独立に存在するということは決してない。常に何かかもろいのであり、何か水に溶けやすいのである。傾向性とは潜在的な性質のことであり、何もないとともに潜在的な性質だけが実現しているということは、潜在性の意味からしてありえないことだからである。そして、傾向性もやはり数的同一性や通時的同一性を持つことがない。東京にはこれと同じ水溶性がいくつあるか、今年の水溶性と去年の水溶性は同じか否か、などと問うことをわ

れわれはしない。潜在的な性質をこれとして名指すことがそもそも不可能なことだからである。傾向性の数を数えたければ、傾向性が顕在化した出来事の件数を数えるしかない。あるいは、傾向性に基盤性質があるとすれば、当の基盤性質を持つ物体の数を数えることができるだけである。しかし、基盤性質を持たない質量に関しては、世界に質量はいくつあるかという問いには、どのようにしても答えることはできない。たとえば、質量は素粒子の数だけあるのだろうか、それとも、マクロな物体の数だけあるのだろうか。

ではものとは何だろうか。ものは性質の束なのだろうか。それとも、ものから性質の衣をはぎ取っていったあとに、性質を支える裸の個体が残るのだろうか。そして、裸の個体によってものが個別化されるのだろうか。

仮にそのような裸の個体が存在するとすれば、神は、世界を創造するにあたって、創造しようとするものの数だけの裸の個体をまず創造し、次いで、それぞれの裸の個体に性質の衣をまとうせらねばならぬ。しかし、それだけでは裸の個体は性質を支える基体としての役割を果たすにすぎない。裸の個体が個別化の役割を演じるとするならば、神はこの個体にあの衣を、別の個体には別の衣をといったように、一つ一つの個体について、それにどのような性質をまとうせらねばならぬかということについても決定しなければならぬだろう。このコーヒーカップは自転車であったかもしれないし、これから自転車に変容するかもしれないのである。しかし、それは、裸の個体に強いこのものを付与することであり、合理的な神の行うことではないだろう。裸の個体が存在するとしても、それは性質の支えとして存在するだけである。

性質の支えとしての裸の個体は、性質の衣を

はぎ取った後に残るものであると言われる。私のコーヒーカップは特定の形や色をしているだけでなく、ある程度の耐熱性を持ち、床に落とせば割れるという性質を持ち、水に溶けないという性質を持っている。このコーヒーカップから耐熱性やもろさをはぎ取ると何が残るのだろうか。耐熱性をはぎ取られたコーヒーカップを電子レンジに入るとどうなるのだろうか。熱で変形してしまうのだろうか。それならば、コーヒーカップは、耐熱性を失うと同時に、熱によって変形するという新たな性質を獲得したのである。何ものかが存在する限り、それは、熱によって変容を被るか否か、どちらかでなければならぬ。また、コーヒーカップがもろさを失った後にハンマーでたたけば、コーヒーカップは壊れないのだろうか。たたいても壊れなければ、コーヒーカップは強くなったのである。もろくもなければ強くもないコーヒーカップなどありえないだろう。ものから傾向性をはぎ取るという想定はナンセンスなのである。

しかし、ものを性質の束とみなすことによつて事情が好転するというわけでもない。コーヒーカップが性質の束であるとするなら、その耐熱性は束のどこに潜んでいるのだろうか。耐熱性のような傾向性は単独では存在できない。では、それは耐熱性以外のコーヒーカップの性質の束が持つ性質なのだろうか。また、神が新たな物質を創造して、それをコーヒーカップに注ぐと、コーヒーカップはそれまでに見たこともないような反応を示すかもしれない。コーヒーカップの未知の性質が顕在化したのである。それはそれまでどこに潜んでいたのだろうか。コーヒーカップを形成する性質の束の中に潜んでいたのだろうか。そうではないだろう。それは、コーヒーカップそのものの中に潜んでいたとみなす他はないだろう。

コーヒーカップは光を当てれば白く輝き、床

に落とせば壊れ、スプーンが触れれば音を出し、少々の熱には変形しない。コーヒーカップは様々な状況の下でさまざまな因果的力を発現させる。コーヒーカップにはさらになお無数の力が潜在しているかもしれない。コーヒーカップとはこうした様々な因果的力の源のことなのではないだろうか。神は、コーヒーカップを創造するときに、これら無数の力の素を創造したのではないだろうか。そして、光を創造することによってコーヒーカップの持つ白さを、熱を創造することによってコーヒーカップの持つ耐熱性を発現させたのである⁶。

ものは状況に応じて様々な性質を顕在化させる。あるものは、光のもとでは色を、生物の体内では毒性を、水の中では水溶性を現し、また、別のものは、適度な衝撃のもとでは音を発し、衝撃が強くなればもろさをあらわにする。われわれは、こうして顕在化した性質を手がかりに、ものの種類を同定する。

ものの種類の同定ならば内在的性質で事足りるが、ものを数的に個別化するにはそれでは十分ではない。それに加えて、さらに、関係的性質と歴史的性質についてもわれわれは知っているのだからなければならない。しかし、それでもまだ十分とは言えない。ものの持続的存在は、性質の時空連続性には還元されないからである。時間を通じて存在するものがあるとすれば、それはわれわれの手の届くはるかかなたにあるものなのである。

注

1 本論においては、一つの世界の内部では不可識別者同一の原理は成り立たないという前提で議論を進めることにする。マックス・ブラックは、不可識別者同一の原理そのものを論じた有名な論文で、やはり二つの球からなる世界を仮想している(Black, 1952)。ただし、ブラックのボール世界は相対空間の世界である。

- 2 ただし、後述するように、ものが突然消えてしまうようなことがなければの話である。
- 3 アダムズはこのものを *thisness* と *haecceity* の二種に分類している(Adams, 1979, 1981)。x の *thisness* とは、アダムズによれば、x と同一であるという性質のことであり、x の *haecceity* とは、x が実在していない場合においても *thisness* と同様の役割を演じる性質のことであり、*thisness* と *haecceity* は、本論における中位のこのもの性と強いそのもの性に、おおよそ対応するのではないかと思われる。
- 4 詳しくは星野(2002, 2008)を参照されたい。
- 5 アームストロングのオリジナルのストーリーにおいて消されるのは、ものではなく人である。また、シューメイカーのケースにおいても神が登場するが、シューメイカーの神は、破壊者と創造者の一人二役を演じる。神は、ある時刻にテーブルを消滅させるよう神命を書き記す。しかし、自らの命を忘れた神は、同じ時刻に同じ場所に同じ性質のテーブルを出現させるという新たな神命を書き加える。シューメイカーによれば、そのようにして出現したテーブルは、同時に消滅したテーブルと、質的には同じでも数的には異なったテーブルである。
- 6 性質と性質の持つ因果的効力ともの間の関係については星野(2006)を参照されたい。

文献表

- Adams, R. M. (1979), "Primitive Thisness and Primitive Identity", *Journal of Philosophy* 76.
- Adams, R. M. (1981), "Actuality and Thisness", *Synthese* 49.
- Armstrong, D. M. (1980), "Identity Through Time", in *Time and Cause: Essays Presented to Richard Taylor*, edited by Peter van Inwagen, D. Reidel.
- Armstrong, D. M. (1997), *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press.
- Black, M. (1952), "The Identity of Indiscernibles", reprinted in van Inwagen and Zimmerman (2008).
- 星野 徹(2002)、「〈私〉であるとはどのようなことか」『埼玉大学紀要 教養学部』第37巻 第2号。
- 星野 徹(2006)、「実体、性質、因果性」『埼玉大学紀要 教養学部』第41巻 第2号。
- 星野 徹(2008)、「偏在する心」『埼玉大学紀要 教養学部』第44巻 第1号
- ライプニッツ、G. W. (1989)、「ライプニッツとクラークとの往復書簡」米山優 佐々木能章訳、『ライプニッツ

著作集 9』工作舎。

Lowe, E. J. (1998), *The Possibility of Metaphysics*, Oxford University Press.

Shoemaker, S. (1979), "Identity, Properties and Causality", in Shoemaker (2003).

Shoemaker, S. (2003), *Identity, Cause, and Mind, Expanded Edition*, Oxford University Press.

Swinburne, R. (1997), *The Evolution of the Soul, Revised Edition*, Oxford University Press.

van Inwagen, P. and Zimmerman, D. W. (eds.), (2008), *Metaphysics: The Big Questions, Second Edition*, Blackwell.